

先生のための夏休み経済教室 in 東京（中学対象）二日目記録

- 1 日時：2019年8月20日（火） 9時30分～15時40分
- 2 会場：東証ホール
- 3 参加者：124名
- 4 主な内容：進行役 三枝利多先生（目黒区立東山中学校主任教諭）

主宰者挨拶のあと以下の教材提供、実践紹介、講演が行われた。

1 時間目 「東証新教材の紹介と実践報告『会社を知ろう！会社を応援しよう！』」

岡部ちはる氏（東京証券取引所金融リテラシーサポート部）

A 岡部氏の教材紹介

内容は、大阪教室（一日目）と同様なのでそちらも参照されたい。

- ・ 試行校の紹介では、公立高校の1年生対象の例（千葉県立津田沼高等学校）を主に発表。同校では、2時限で2パート共に実施し、証券知識普及プロジェクト作成『ケーザイへの3つのトビラ』の学習につなげるねらいでの授業として位置づけた。生徒の進捗を教材実施中随時確認しながら進めていた点や、ワークの最後に自己採点をさせていたことが特徴的だった。
- ・ 実施いただいた杉田先生からコメントをもらった。

B 杉田孝之先生（千葉県立津田沼高等学校教諭）より実施後の感想

- ・ 高校1年生「現代社会」で2時限かけて実施した。
- ・ この教材の良いところは、教師が見通しをもって取り組めることである。
- ・ 課題点としては、1時限目（会社を知ろう！）と2時限目（会社を応援しよう！）のつながりを生徒に理解させながら実施していく点である。
- ・ また、「会社を知ろう！」中の発表の際に、聞いている生徒が他企業の情報（他の生徒の発表）を聞きとれるかどうかも課題点である。しっかり聞いてワークシートへ記入ができていないと、「会社を応援しよう！」中のワークの1つである、投資先を選ぶ際の根拠を理解できず、「いいね」シールがはれなくなってしまう。
- ・ 2学期に『ケーザイへの3つのトビラ』内「ワールドトレジャーランド再生計画」の教材を実施して、国際経済分野の授業につなげる計画である。
- ・ この教材を使うことで、生徒から問いがでてきて、それを次の学習につなげることができるかどうか教員が考えるべき重要な点である。

C 三枝利多先生よりコメント

- ・ この種の教材は、全て指導用資料通りに実施するのではなく、自分なりに補助ワークシートを

準備するなど授業のねらいや生徒の実態にあわせて使うとより効果がでる。

- ・この教材実施だけで1時限(2時限)使うのは、少し勿体ない。講義形式の授業を付加するなどの工夫があつてよいかもしれない。
- ・あらゆる要素を持つ教材はないに等しい。何かの要素を重視したら何かを捨てなければならない。さらに実施目的をどこにするのかという観点を持って取り組むと良いのではないか。
- ・生徒が自分の意見を自分の言葉で表すことができる実践は可能か今後知りたい。

<質疑応答>

Q：業種を選択したポイント・根拠は？

A：8つにしたのは40人学級(1グループ5人)をイメージしたためである。選定基準は、東証の33業種をもとにわけた。生徒にとっても先生にとっても具体的にイメージが浮かびやすい業種・企業活動を選択している。

Q：中学校2年生で職場体験を多くの学校で実施している。この教材とのつながりの例は？

A：中学校2年生に対する実施や、や総合学習科目での実施ではまだない。2年生で事業プランカードの理解ができるかが懸念材料だが、教師の補足で実施は可能で、キャリア教育への応用は十分可能ではないかと考える。

2時間目 実践報告 探究活動の試み

A 「中学校3年間の探究活動～卒業レポートに向けて～」

川村由美子先生(大阪市立咲くやこの花中学校教諭)

大阪での経済教室1日目(8月5日)の内容と同様なので、そちらの記録も参照されたい。

- ・4つの特徴ある分野で生徒を募集し、高校の教師が週2時間ずつ授業を行う。
- ・高校の総合学科に進学し、高校からは80名追加募集があり、6つの系列に分かれる。
- ・大きな本校の特色は「多様化」ではないか。
- ・生徒が自らテーマを設定する。探究活動を社会科の授業の一環で行っている。
- ・中学3年生で「持続可能な社会をめざして」という大きなテーマを設定し卒業レポートを書く。
- ・ブレインストーミングを行う。
- ・見通しを持って計画的に学習を進める。
- ・発表を評価に入れない。相互評価をする。生徒の手を使って評価をしている。
- ・3年間でできることを少しずつ増やしていく。情報機器の使い方やPPTの使い方など
- ・探究時間を行う授業時間の確保が課題。

B NIEを活用した探究活動から社会討論へ 飯島知明先生(大阪府島本町立島本第一中学校教諭)

大阪での経済教室1日目(8月5日)の内容と同じなので、そちらの記録も参照されたい。

- ・新指導要領「未知の世界にも対応できる 思考力・判断力・表現力」を身につけさせるねらい

の授業である。

- ・言葉や社会的な常識を獲得させて、心を耕してやりたい。今から勉強やでという雰囲気を作っていく。
- ・新聞を読んだら喧嘩ばかりしている生徒も案外食いついてくる。「社会は分かる」「社会は詳しい」
- ・顧客（生徒）満足度を上げるために、生徒の顔を思い浮かべながら記事を選択する。分野を工夫。
- ・情報鮮度は高い方が食いつきは良い。当日の朝刊で勝負する。
- ・学力の中位層から高位層が満足していない。「書いていないことを教えて」という生徒からの要望
- ・NIE 実践指定校に手を挙げて実践 新聞は最小限の文字数で最大限の情報を伝えている。洗練された日本語 ごちゃごちゃしていない→語彙の獲得→生徒指導事象の減少
- ・スクラップノートを自主的に作るようになってきた。紙の上での情報が実際に社会と繋がっていく。

天満駅のミックスジュース屋さんや、二条城のあらいぐまによる傷を実際に見に行く。

- ・巡検部の活動...社会と繋がる。校長先生の懐の深さも必要。保護者への案内文書
- ・発表のための「練り上げ活動」...他者に紹介する。どうやって分かりやすく伝えるか？
- ・とことん議論している間に、思考が揺れ動く。最初は「社会解説」と言っていた。
- ・さくやこの花の社会科部と社会討論の「練習試合」→社会討論会へと発展（今秋 18 回目）ほぼ初対面の生徒同士で議論
- ・考えなくなる討論テーマを 3 か月前に決める。3 か月後にこういうことで話題となっているだろう。
- ・プロ解説 その道の人をゲストで呼んでくる。
- ・大阪市内に住んでいながら在日の人は選挙権がない。大阪都構想についてどう考えているかインタビューした生徒もいる。
- ・思考を揺れ動かすことが大切。
- ・「ジレンマ教材」 TPP の是非 「将来お百姓さんやりたい人？」誰も手を挙げない。うーん。
- ・社会討論の長所...教材研究が深くなる。実社会や家庭と繋がる。社会のしくみづくり=社会参画の気持ちが芽生える。言語活動を行うことによって、訳のわからないけんかがほとんどなくなる。
- ・ジレンマがあるようなものを教材として探してきて、価値判断をさせる。揺さぶる。また価値判断させる。

C コメント 大倉泰裕先生（千葉県立松戸向陽高等学校教諭）

- ・中学校と高等学校は違うなという印象だが、教育困難校の生徒は伸びしろが非常に大きいのは共通点。
- ・先生と生徒との関係の中で授業が作られていく。それぞれの学校の事情もあるのでそのまま導入は難しいが、まずは「つまみ食い」から始めると良い。

- ・現行の学習指導要領（H20年版）は作り始めたのは平成15年くらいから。「活動あって中身なし」はダメ。授業をやる以上は、ねらい・目的があるはず。それが何かを見るのが、授業を見る上でのポイントである。そのねらいが達成できたかが授業評価、授業見学のポイント。
- ・物の見方や資料の見方、物事の考え方が分かったという言葉が生徒の感想にあった。
- ・知識だけでは解くことができない「新テスト」がはじまろうとしている。
- ・議論するときには、エビデンスが必要。こういうデータがあるので、こういう力をつけさせないといけない。思考力・判断力・表現力を身につけさせることが社会科で求められている。
- ・社会参画意識の涵養、持続可能な社会に向けて社会参画する。そのような生徒を育てていくことも求められている。
- ・とはいえ、今の生徒はちゃんと言葉を使いこなしているのだろうか？
- ・言葉を使う能力は落ちているのではないか？ メモをとれない。漢字が書けない。誤字・脱字が多すぎる、等。自分の言いたいことを相手にきちんと伝えられない。相手が言っている真意を読み取ることができない。このことが問題ではないか？自分の言っていることが周囲の人にどのように受け取られているのかが分かっていないケースも多い。
- ・自分の言いたいことをまとめることができない。このような生徒が議論に参加させるためにはどのようなところから指導を始めればいいのか？
集団で生きていく、社会で生きていく上で、コミュニケーション能力に課題がある生徒が多い。だからこそ指導は丁寧にやってゆかなければいけない。
- ・川村先生のご発表に対して。最も難しいのは課題設定の箇所だと思う。
- ・飯島先生のご発表に対して。思考の練り上げの部分を見たかった。例えば、憲法を扱うのであれば立憲主義や人権などの押えるべき事を押えて思考が深まっているか、情報が的確か、そのあたりを見せてもらえると有り難い。

3時間目 「授業のネタと経済的見方・考え方」 河原和之先生（立命館大学非常勤講師）

(1) 授業のネタと見方・考え方

授業のネタとは何だろう？単なるエピソード、雑学ではなく、知的興奮があり、授業のねらいと合致したものではなければならない。今回は、授業のネタから知識・理解だけではなく見方・考え方を鍛える授業提案をしたい。今、ブームになっている「チョコちゃんに叱られる」が授業づくりのヒントになる。これまでのテレビ番組は「東大王」に見られるように、知識の量を競うクイズ番組が主流であった。また、分かりやすい解説が受ける池上彰さんに代表される、分かりやすい内容が好評である。しかし、「知りたい」という欲求がかき立てられ、主体的な学びに繋がる課題設定が大切である。「チョコちゃん」では、「どうして蚊は人の血を吸うの？」「卒業前に女の子が、好きな男の子の第二ボタンをもらおう。なぜ第二ボタンなのか？」などの事例が紹介されている。「蚊が人の血を吸うのは、メスのみで、子どもに必要なたんぱく質の摂取のためである」。すべての生徒がくいつき、自由な発想で発言できる、“学力差”のない課題設定が重要である。また、「蚊」に刺されても「痒いが、それが蚊の子どもの生命を救うならいいか」(笑)という「生き方・考え方」(?)が、揺れる内容が「授業のネタ」である。

ネタを類型化してみる。

驚きや葛藤のあるネタ

矛盾や対立のあるネタ

切り口が単純でも深い学びのあるネタ

日常生活から科学の世界にせまるネタ

早く分かりたい！解決したいというネタ

わくわく感があるネタ

思考や判断が揺れるネタ

(2) 社会科教員の資質とは

それでは、社会科教員の資質とは何だろう。教材発掘力、授業構成力、課題・発問の設定力、基礎知識、学問的知見、情勢と教科内容の関係、ALと授業方法、学習者の視点である。この中で、ネタと関連するのは、最初の三つである。

(3) ネタに関する具体例

・街中にある様々ネタ

①「くまもののほっぺたの赤は？」 答え、「トマトとすいか」

②「一度でいいから（ ）ですいかを食べてみたかった。」（沖縄今帰仁）

「沖縄のすいかは全国 12 位。（ ）に当てはまる言葉は」という問いは、「スキー場」「スイカ割」など多様な回答がある。答えは「こたつ」である。つまり、沖縄では温暖な気候から、冬場にスイカを出荷し「付加価値」を与えている。ここから「促成栽培・抑制栽培」を理解することができる。また、以上の「問い」は、間違っても恥ずかしくなく、自由に発言できるものであり、他の単元でも活用（応用）できる「転移する学力」である。

③「あなたは今 SDGs に貢献しています」のキャッチコピー（近鉄電車奈良線のつり広告）、「これはどこに掲示してあった？」 答えは、「電車」であり、電車に乗ることが、SDGs の目標 13 である「気候変動に具体的な対策を」への貢献である。

④こんな吊り広告もある。「買い物は（ ）です！」。答えは「投票」である。買い物で何を選択するかは、“どのような社会を作っていくか”とも関わる。

⑤「どうして街の本屋さんがなくなってきたのか？」というテーマも、社会の変化から、多面的・多角的に分析できる。

・驚き・葛藤があるネタ

⑥世界で肥満が増えている国は？ 答え、「トンガとキリバス」。なぜアメリカではないのか？ グローバル化により、先進国からファーストフードをはじめ、安価な油脂性の牛肉や羊肉が輸入され、果実や魚の食べる量が減ったことによる。

⑦ドイツで真面目に預金すると貧乏に。酒ばかり飲んでいる弟が大金持ちに。なぜ？

答えは、「ハイパーインフレのため」

・日常生活から科学の世界に迫るネタ

⑧関西国際空港は3つの市に分かれている。なぜか？早く知りたい、教えて！というテーマ設定が大切である。答えは「固定資産税」が関係する。

・ゲーム的要素のあるネタ。

⑨ダイナミックプライシングゲーム。Jリーグサッカーのチケット代金が、天候や観客動員の等により変化するというもので、価格決定をゲームを通じて学ぶことができる。

私の授業は、一般的に言われる「展開」の項目はないに等しい。つまり、「導入→まとめ」の繰り返しで、常に“ワクワク感”が持続するよう配慮している。

(4) 新しいネタ

東大阪の「ネジ」物流会社からの取材による授業構想である。

ネジを世界で最初に使ったのは、活版印刷を発明したグーテンベルクである。印刷機がなければ、「イソップ物語」「グリム童話」「音楽の楽譜」もなかった。聖書も印刷できないだろうから宗教改革もなかったかもしれない。ネジメーカーの社長（ネジをどう売りだすか）vs.ネジを必要としているメーカー（ネジをどう買うか）の二つをどう結びつけるかが「物流」であり、これが、経済の“効率化”“コスト削減”を生む。東大阪にあるネジの物流を担う会社は、ネジ製造会社1160社からネジを入荷し、5400社に出荷している。日本には約300万アイテムのネジがあるが、そのうち、100万アイテムを入荷している。運送会社は23社でPM5時までに入荷すれば、明朝9時には東京まで出荷することが可能である。その秘訣は、会社の立地条件による。トラックターミナルの近くにあり、近畿自動車道、そして中央環状線にも近接している。「半導体は産業の米 ネジは産業の塩」と言われる。地味なネジが産業に果たしている役割と、物流の見方・考え方が教材化できる。

(5) 授業構成力とネタ

「概念学習」は、数学のイメージで、身近な話題から「概念」を習得し、応用問題に取り組みせる。「比較優位」については、以下の事例で実践した。翔太は取材力抜群で、パソコンも堪能だ。いっしょに仕事をしている郁子は、取材もパソコンも普通の能力だ。二人は、どのように分担すれば仕事が能率的になるか」という事例から「概念」習得する。翔太が、二つの仕事をするための無限の時間はない。そこで、「取材」は翔太、パソコンを重美に任せると、郁子は翔太に対してパソコンは「比較優位」を持っているという。活用事例は「オランダ、農作物の輸出はアメリカについて世界第2位。なぜ？」「オランダと日本の食料自給率を比較し、気づいたことを発表しよう」と問う。オランダでは、得意な野菜やイモ類を輸出し小麦などを他国から輸入している。それは、オランダがEUに加盟していることと、地理的条件による。日本も食糧自給率が低い状況が問題視されているが、比較優位を考えると、それほど問題ではないとも言える。東アジア（東南アジアも含め）の平和構築を前提に、それぞれの国々が得意なものに特化すれば、おのずと解決するというのは楽観的だろうか？前提の東アジアの平和構築が難題である。

「四大文明の隣にはどうして乾燥地帯があるのか？」乾燥地帯には遊牧民族が住んでいる。ナイル川周辺に住んでいる人たちは、小麦は生産しているが、毛皮もなければ、乳製品もなく、

「交換」することが必要になってくる。「交換」には、「商業」が不可欠で、そのために「言葉」が生まれる。また、余剰生産物が生まれると管理するための倉庫が必要であり、保存には記録が必要である。4大文明の発祥地に、「国家」が誕生し、「交換」「商業」「言葉」「文字」が発達したことを「大河の隣の乾燥地帯」から考えさせることができる。

(6) おわりに

「教師の仕事の流儀」とは・・・・・・・・すべての生徒が“学力差”を超え意欲的に参加できる授業をつくることである。「レベルの高い」実践とは、その質も大切だが、「できる子」「できない子」を含め、どれだけの生徒が授業に主体的に参加しているかが問われている。

4 時間目 講演 『持続可能な社会』の教え方

諸富徹先生(京都大学大学院経済学研究科/地球環境学堂教授)

(1) 中学公民教科書の持続可能性

- ・ 持続可能性、SDGs、環境と経済の関係をどう見ていけばよいのかという視点での話をする。
- ・ 中学校公民的分野の教科書(東京書籍)に「持続可能性」という語句はいきなり出てこない。
- ・ 最初に登場するのは「公害の防止と環境の保全」、次に「資源・エネルギー問題」である。
＜深めよう＞というコラム「公害のない社会へ 水俣市を例に考える」で、地域社会で持続可能な社会をどのように実現していくかが登場する。
また、＜深めよう＞コラムで「日本のエネルギー政策のこれから」が登場し、CO₂は減らさなければならない、原発にも問題はある。再生可能エネルギーもまだ始まったばかりという現状を踏まえて、社会の選択問題として考えさせる構成になっている。
そして、「社会科の学びを持続可能な社会の形成につなげる」というタイトルで持続可能性が登場する。
- ・ 持続可能性の問題は、科目横断的に扱う必要がある問題であろう。それは、産業革命以来の物質文明に依拠した歴史を考え、近年の気候変動の状況について考えていくことが必要だからである。

(2) 経済と環境

- ・ 環境問題を経済で扱うと、経済と環境に関する伝統的な対立観念にぶつかる。
- ・ 私は、外部不経済を内部化するには環境税の導入が必要ではないかと考えているが、政府の中央環境審議会では猛反発を受ける。産業界の代表者は総論賛成だが各論になると反対する。「持続可能な社会」「SDGs」へ向けて実践していきましょうとなると、待ってくれとなる。環境規制は、産業の国際競争力を低下させ、失業を増加させ、技術革新へ悪影響を与えると指摘される。
- ・ このような難問をどう打ち破るか。世の中それほど単純なものではないということ子どもたちに伝えることが重要かもしれないが、私は、この対立を乗り越える論理はあると思う。それがイノベーションである。

(3) イノベーションと環境問題

- ・ シュンペーターのイノベーションは技術革新と訳されているがこれは正確ではなく、「社会科学領域における新結合」と捉えるべきだろう。
- ・ そのイノベーションが環境で本当に可能なのか？
- ・ 経済と環境は対立すると言われてきたが、「日本版マスキー法」の事例がある。
当初こんなに厳しい規制はやめて欲しいと団体は主張したが、メーカーによって態度が異なっていた。厳しい規制が入ったことによって、大打撃ではなく、笹之内氏の 2000 年の評価にあるように、成功した会社が出てきて、逆に日本車の評価は高くなった。
アメリカの経営学者ポーターが、スマートに設計された規制はイノベーションを起こしようという説（ポーターの仮説）を提示しているくらいである。
- ・ スウェーデンの事例も参考になる。
排出を減らすための技術が、環境税が入ったことによってどんどん発展していった。それは、環境税の負担を少しでも減らしたいというインセンティブが働いたためである。年々限界費用が下がっていったのである。

(4) 日本での取組みの問題

- ・ 経団連の主要メンバーである製造業の人たちは、「私たちはできない」と 100 の理由を並べるが、本当にそうだろうか。日本が先駆的な温暖化対策には取り組む必要がないという理由も列挙するが、本当だろうか。
- ・ 日本の産業界が保守的になったと感じる。こうなったら、外資系の企業を呼んで、中央環境審議会で発表してもらうように外からの刺激で、経営の前提に気候変動の問題を置くくらいでないとダメなのではないかと思わされるような状況である。
- ・ 温暖化防止にチャレンジしていく企業を応援する風潮をもっともりあげる必要がある。

(5) 経済成長と環境対策

- ・ 経済成長をするなら環境対策は邪魔になるとされてきたが、近年のロジックは、「脱炭素化」はむしろ経済成長をもたらす可能性があるとされている。
- ・ 経団連が言っていることが正しければ経済成長しているはずだが、現実はそのようではない。
- ・ 炭素税が入ったことによって、イノベーションを誘発することは実証されている。これは OECD や従来保守的とされていた IEA（国際エネルギー機関）の最近の報告書からも明かである。
- ・ 再生可能エネルギーのコストは劇的に低下していて、いまや化石燃料と競争可能なほどになってきている。
- ・ その際、炭素生産性がポイントになる。これは付加価値を生産するのに、どれくらいの炭素を投入するかの比率である。
- ・ 日本は、炭素生産性が他国（ドイツやイギリスなど）に比べてあがっていない。つまり、正面から問題に直面して対応できていない、対応しているかもしれないが、結果が出ていないのである。
- ・ 産業構造をかえ、気候変動に取り組む方が経済成長をもたらす。ここ 10 年 20 年でどうなるか

は言い切れないが、大きな阻害要因となるわけではないことまでは分かってきている。

- ・カーボンプライシングの導入と炭素生産性を上げることで、経済と環境は対立するという対立関係の観念を超えていくことが、持続可能な社会の実現に繋がるのではないか。

<質疑応答>

Q：環境と経済成長が両立できるという話だったが、世界で鉄を作っている人たちは環境税の導入が進んでいることについてどのように考えているか。

A：鉄鋼は非常に重要で、古代から絶対に必要とされる素材であると作っている人たちは自信を持っている。鉄鋼が産業で消えてしまうことはない。水素還元法という方法によると3割減が可能だが、製法の転換が必要で莫大な費用がかかる。電炉という世の中にある鉄を集めてきてスクラップして、もう一度作っていく方法がある。これなども将来的にもっと注目されるだろう。最終的には鉄代替製品の開発が必要ではないか。炭素製品も鉄が使われている部分に変わってきている。航空機素材などに使われている。木の繊維で作ったかなり強度な素材で自動車のボディの8割くらいは作れると言われている。鉄と同じくらいの強度で、鉄やセメント以外の代替素材を開発していくことが必要ではないか。

Q：なぜ日本の産業界では環境に対する意識が低いのか？

A：産業界の新陳代謝がゆっくりで、産業構造が変化していない。殆ど顔ぶれが変わっていないことが背景にある。トヨタを超える企業が現れていない。新しい産業が出てきて乗り越えることにはなっていない。産業のしくみや労働が産業を超えて移動していないことが要因。だから、脱炭素という要請が出てきたときに、変わりにくい。経営者の意識も。決断力の弱さなどもあるかも。

Q：京大の学生に対してどのような授業をやっているのか、また反応はどのようなものか？

A：本日の講演の資料や審議会で提出した資料を使っているが、話し方は大学の授業と同じである。学生には、常識は本当に常識か？という意識を持ってほしいことを伝えている。根拠に基づいて考える、それが議論を誘発する。そうすれば、学生がすぐに議論ができるというところではない。学生は、SDGsについて学んだり、教師より学生や生徒の方が幼少時から環境教育を受けてきた年代であるが、就職の時など、経営者に反対するような意見を言うと、解雇されるのではないかという恐れがある様子は伺える。

スウェーデンの例を出したが、産業には厳しいが労働者には手厚い。社会人が大学に通ったりすることに財政支援するなど、変化を支える社会のしくみはスウェーデンにはある。変化していくことは必要である。中学生にも、君たちが大人になる世界は、変化への対応力が身につけてほしいということは伝えてほしい。

Q：産業構造の変化が緩やかであることが伝統となり、日本の強みになるのではないか？

A：日本のDNAが製造業に合っているのではないか。デジタル化や脱炭素化を製造業の強みを活かしながら、姿を変えていきながら、気が付いたら、名前はPanasonicとかSONYで変わらないが、やっていることは全く変化しているというようなことがあるかもしれない。

<全体のまとめ> 篠原総一先生（経済教育ネットワーク代表）

- ・昨日は学習指導要領を活かした実践事例を3つ紹介したが、本日はこれに加え、1つの教材紹介と3つの実践紹介があった。
- ・昨日、実践事例について問題点の整理をしたので、本日は、事例紹介を通して気付いたことを述べる。
- ・東証の教材は、企業という社会の仕組みの歯車の一つを取り上げて、その複雑な制度や機能を生徒に対して「見える化」ができていて、分かりやすい教材である。
- ・3つの実践事例は、教科書などからかけ離れた、しかも必ずしも通常の教室内でおさまりきらない教育モデルである。いずれも、生徒をその気にさせるという意味で、圧倒的に優れた事例であるが、実際に実施する上では、個人技を抜け切れていない怖さが残っているように見受けられた。とはいえ、圧倒的に参考になる実践事例である。
- ・各々の提案者が準備に大変なエネルギーをかけている。先生方の負担を軽減し、多くの先生が活用できるよう、経済教育ネットワークでは、工夫を重ねていきたい。
- ・三人の先生方の実践では、何を教えるのかについて、最初からシステマティックに決めてあるのではなく、生徒との相互やり取りや先生個人の判断で教育対象を選択しているため、先生方がこのような手法に取り組む際には、素材の選択について中学公民教育全体のなかでのバランスに配慮して欲しい。
- ・河原和幸先生の場合には、このような実践を通して、生徒に関心を持って取り組ませることに圧倒的な効果をあげているが、同時に知識部分にも配慮されている。河原先生は、ネタの授業を繰り返しながら、何回かに一回は徹底的に教科書を読み、理解させる授業を入れていらっしゃることに注意されたい。
- ・大倉先生によるコメントで、評価をどうするかということが取り上げられたが、評価については、これからは授業を通してどういう効果があったのかという視点が大切になっていくはずである。
- ・文科省で、ある項目の理解に躓く生徒は、それまでのどの教科でどのような項目の理解ができなかったのか、という生徒の理解度の因果関係を見える化するモデル開発が始まっている。
- ・京都、品川区、仙台市でスチューデントシティという注目すべきプログラムがある。本日の卒論プロジェクトも含め、規模の大きい教育プログラムについては、アンケートなどでよし悪しを判断するという従来の評価方法を超え、その教育を受けた生徒が将来どのような人間になっていくか、あるいはどのような分析力や課題の発見力を身につけたかといった観点からプログラムの評価ができるAI・ビッグデータ分析が必要になるだろう。これは、先生方の課題ではなく、文科省なり教育委員会などが取り組むべき課題である。

記録：中山義基、補足：新井明